勇者と魔王のメタ発言

ひゐらぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者と魔王のメタ発言

【Ｎコード】
Ｎ２９５２Ｙ

【作者名】
ひゐらぎ

【あらすじ】
おきのどくですが　ゆうしゃとまおうは　いせかいにてんそうされて　しまいました――――そうして二人が来たのは魔法のない世界！　聖剣はただの剣になっちゃうし、魔法なしの魔王なんてただの人！　それで魔物もいないけど、魔物よりも人のほうが怖い！？　しかも別世界だから、ここでしかできない裏トークしまくり。それでも二人は元の世界に戻る方法を探して、放浪する。

００：魔王、逃亡を図る。（前書き）

誤字脱字がある可能性大です。
もし発見しましたら、お優しい方、報告お願いします。

００：魔王、逃亡を図る。

勇者は聖剣を天へと向けて掲げた。無駄な装飾のない細身で銀の刃が、広間のいくつもの明かりを反射し輝く。すると、銀の刃は自ら深い青の光を発した。サファイアのように深く、しかし澄んだ青の光は傷だらけの広間を照らし、そして凛々しい勇者の顔をも照らす。

と、青い光が不意に治まった。それと同時に、青い光の球がいくつも姿を現し、いまだ青い輝きを帯び続ける掲げられた聖剣を中心に円を作る。

勇者はその聖剣を、前方へと振るった。

すると青い光の球はその聖剣の動きが指示であるかのように、前方へと宙を駆けた。その先にいるのは、片手に大きな杖を握り黒い衣を纏った男――魔王。

だが魔王は何の様子も見せず、茨が巻き付き深紅の花が一つだけ咲いた杖で、トン、と地面を突いた。すると魔王の周囲から漆黒のガラスのようなものが生えてきて、それは半球を作るかのように魔王を覆うと、飛来してきた勇者の青い光の球を弾き返す。

勇者は苦い表情を浮かべた。弾かれた青い光は広間の壁へと音を立てて衝突する。と、魔王を覆う漆黒の壁から、赤い茨の鞭が何本も吹き出してきた。それは蛇のように身をくねらせながら勇者へと殺到する。勇者は目を見開いた。

しかし考えるよりも先に聖剣を握った腕が動いた。青く輝く刃が

宙を滑り、殺到してきた茨を切り落とす。切り落とされた茨は切り口を聖剣と同じ青色に染まると、その光に全てを侵食される。そしてガラスが割れるようにして粉砕し、空気に溶けてなくなる。勇者は舞うようにしてステップを踏みつつ剣を振るう。純白のマントが翻る。切り揃えた金髪の端も揺れる。だが茨は多く、いくら切り落としても次から次へと襲ってくる。

茨の束が、勇者の顔を掠める。頬が切れ、血が流れる。それでも勇者は構わず剣を振るう。背後から地を這い忍び寄ってきた茨を避け、剣を突き立てれば茨は青い光似つつばれて粉砕する。そして床に刺した聖剣を抜き、次の茨を狙う。だがその隙を狙った茨の一つが、ついに勇者の身体に巻きついた。

「ふっ……！？」

茨はきつく身体を締め付ける。勇者は慌てて聖剣を握りなおすも、次の瞬間勇者は投げ捨てられた。宙を飛び、身体は広間の壁に打ち付けられる。全身がばらばらになるしょうな衝撃が襲いかかる。

勇者は崩れた壁の残骸と共に床に落ちた。落ちた瓦礫の上にぐったりとした勇者が倒れ、またその上に瓦礫が落ちる。

宙をうねっていた赤い茨が煙になって失せる。同時に漆黒のガラスの壁も消える。中から現れた魔王は、ぐったりとした勇者を何も言わずに見つめていた。だが深く溜息を吐くと、片手に握った大きな杖の先を勇者へと向けた。すると先端に咲いていた真紅の花から稲妻が宙へと駆け出す。稲妻は広間の高い天井まで上がったかと思うと、勇者めがけて落下する。

だが勇者は目を開けると、すぐさま瓦礫の隙間から飛び出した。

宙を一回転し、床へと膝を突いて着地する。ついさっきまで勇者がいた瓦礫の山に、稲妻が落ちる。勇者は魔王のもとまで駆け出す。聖剣の青い輝きが増す。

魔王は微動もしようとせず、勇者を見つめている。勇者は口を固く結んだ。そして踏み込むと跳ね上がり、魔王へと切りかかった。

高い音が広間に響き渡る。魔王は勇者の聖剣を杖で受け止めていた。だが勇者はにやりと笑うと、魔王の腹へと片足を打ち込み、蹴り上げた。魔王の身体が宙に浮く。しかし魔王は落ちてくることなくそのまま宙に浮遊した。そこに勇者はまた剣を滑らせる。だが浮遊した魔王はその刃をやすやすと避けると、勇者の背後へと着地した。

慌てて勇者は振り返った。そこには杖を構えて不敵に笑う魔王の姿があった。その杖に絡みつく茨が伸び勇者の足へと絡みつく。絡みついた茨は黒く輝くルーンの文章になると勇者を中心に魔法陣を構成する。勇者が目を見開いてその魔法陣から抜け出そうとするも、もう遅かった。魔法陣の内側にあった床が瞬時に消えたかと思うとそこに漆黒の水たまりが現れた。魔法陣の中にいた勇者は、その水たまりの中へとずぶずぶ沈んでゆく。足、臑、太股、腰、と勇者の姿が漆黒に呑まれていく。

「くそっ！　なんだこれは！」

勇者は漆黒の水たまりから抜け出そうと必死だ。しかし飲み込まれてしまった足は上がらないし、床に手をついて身体を引っ張り出そうとしてもびくともしない。それどころか、抜け出そうともがけばもがくほど、漆黒の水たまりはあたかも底なし沼であるかのように勇者を呑み込もうとする。そうして腹、胸、と呑み込まれていっ

た。

魔王はにやにやしながらそんな勇者を見下ろしていた。

「無駄じゃ、影ほど深いものはない……」

しかし勇者は必死で抵抗する。聖剣を握っているも、両手を床についてこれ以上なんとか呑まれまいと精一杯の努力をしながら魔王を睨んでいる。だがそれでも勇者の身体は確実に漆黒に呑まれていっている。そこで魔王は杖の先で勇者の手を突いた。尖っている杖の先は勇者の手の甲へと刺さる。

「っあぁ！？」

勇者は思わず悲鳴を上げて、その手を床から放してしまう。そしてその腕もずぶずぶと漆黒に呑まれていき、肩をも呑みこむ。残る命綱は、聖剣を握りつつも床にしがみつく右手だけ。しかし魔王はその手をも漆黒の中へと蹴り入れた。勇者の残された手は、聖剣と共に漆黒へと呑まれ、そして頭をも呑みこまれ漆黒の中へと消えてしまった。

広間は激戦の傷をいくつも残しながらも、静かになった。魔王はただ、勇者の呑みこまれていった漆黒の水たまりを見下ろしている。水たまりからはぼこぼこといくつか泡が出たかと思うと、それきり黙ってしまった。それでも魔王は無表情で水たまりを見下ろす。まるで、勇者が中から出てくるのを待つように。

そうして深く溜息を吐いた。黒々とした癖のついた長い髪を掻き毟り、漆黒の中へと杖先を入れる。

「この物語には勇者が死ぬというエンディングはないんじゃが……奴め、中で聖剣を手放しおったな」

やれやれ毎度毎度仕方ない勇者じゃのー、と、魔王は杖で漆黒の中をかき混ぜる。そのとたん、水たまりが泡を噴出しながら膨れ上がった。そして――青い光の爆発。

魔王は後ろへ一歩跳びのくと、青い光の中を見つめる。

目を閉じてもその眩しさが瞼を通り越し、肌を通して分かるほどの輝き。魔王は目を閉じた。

光の中から、輝く聖剣の先が飛び出してくる。それは魔王の胸に深々と刺さり貫通した。そのとたん、青い光が治まる。魔王の前には、剣を握った勇者の姿があった。

魔王は胸に聖剣を突きたてられつつも、にやりと笑った。しかしその表情も一瞬にして苦痛のそれへと変わる。

自信に満ちているも、何故か驚愕した表情を浮かべる勇者は、魔王の胸に刺した聖剣をゆっくりと引き抜いた。すると魔王はよろめくも数歩後退し、そこで片膝をついてうずくまった。脂汗を浮かべひどく苦い顔をしながら、胸の傷へと触れる。聖剣による胸の傷からは、青い光が漏れていた。その光は少しずつ、魔王の身体を覆っていく。身体を侵食している。

「くぅ……」

魔王は苦しそうにうめいた。青い光に侵食されていく身体が震えている。勇者はそんな魔王の様子を見ながら、不敵に笑った。

「終わりだな、魔王」

輝く聖剣を、一振りする。

「『魔王の胸に聖剣を突き立てよ』――なるほど、聖剣の予言はこういうことだったのだな。お前の胸に聖剣を突きたてれば、聖なる光がお前を浄化するのだな。そして浄化されたのならば、悪の化身であるお前は何も残すことなく消え失せる」

魔王は殺気のこもった瞳で勇者を睨んでいた。しかしその口から出るのはうめき声だけ。しかし、そのうめき声が笑いへと変わると、勇者は目元をひくつかせた。

「何がおかしい？」

「全部じゃよ」

青い光が身体を蝕んでいく。しかし魔王は顔を上げ、嘲るような笑みを勇者へ見せつけた。

「こんなもので、わしが死ぬだと？　まったく滑稽じゃ！　世界中の悪の集結であるこのわしが、そんなちゃちな剣で消えるとでも思っておるのか！」

魔王は身体をゆっくり起こすと、杖を頼りに立ち上がる。

「その剣はわしに深手を負わせるだけしかできん。わしを殺すことは無理なこと」

「な、何故だ！」

勇者が危機せまった顔で怒鳴る。

「こ、この剣は我らの希望、お前を倒すための聖剣ではないのか！この剣を持ってすれば、悪は滅するのではないのか！」

「お前、何を言っておる」

魔王は鼻で笑った。

「悪がこの世から消え去るわけがなかろう。明かりが人々を照らせば、人々の足下には影ができる。善と悪もそれに同じ。表裏一体のものじゃ。そして悪がある限り、わしは死なん。死なないのじゃ！」

魔王は杖で足下の床を叩いた。するとそこに、魔王を中心とした魔方陣が浮き出る。それはこれまでの戦いで姿を現した魔方陣とは違い、桁違いに大きくルーンの量も多い。魔方陣は勇者の足下まで広がった。勇者は慌てて跳び退き、魔方陣の外へと出る。魔方陣の中央では、深手を負っても威厳に満ちた魔王が浮いている。

「何をする気だ！」

勇者は聖剣を構え、宙に浮く魔王を睨む。魔方陣が赤紫色に輝き、魔王の姿を照らし出す。魔王は何故か勝ち誇ったように笑っていた。

「少々暇をもらおうと思ってな。わしは傷を負いすぎた……世界の狭間で、休ませてもらうぞ？」

「……逃げる気か！？」

「まあ、平たく言えばそういうことじゃ」

魔方陣の輝きが強くなる。魔方陣のルーンが浮き出し、魔王の周りに漂う。

「勇者よ、お前は中々強かったぞ。ま、中々なんだがな。もう少し修行しておけばわしを楽に倒せたんじゃないのかのぅ？」

魔王は笑いながら勇者を見下ろす。

「さて、永い年月をかけて傷を癒させてもらうとしよう――悪がこの世に蔓延れば、わしはまた蘇る。それはいつになるのだろうなぁ」

魔方陣の輝きがいよいよ眩いほどになった。宙を舞うルーンも並んで文章となり、魔王の身体を包み始める。

「お前に会うことは二度とないだろう、勇者――さらばだ、わしとお前が再び出会うとき、お前は永い年月に骨と化しているだろうよ！！」

魔方陣が爆発した。赤紫色の光が広間を満たし、勇者の視界を満たす。

「くそっ……」

勇者は聖剣を固く握った。

「くそっ……！」

光へと目を見開くと、世界は赤紫色で何も見えない。だが勇者は、その中へと突っ込んでいった。足音が光の中に響く。恐怖はなかった。あるのは――怒り。

「逃げるなんて……卑怯だぞ！　魔王！　大体お前が死なないのな

ら、私は一体なんのために旅をしてきたのだ！！　結構辛い一人旅だったんだぞ！」

心の奥底から叫びながら、光の中を駆ける。そして光の中に浮く魔王の姿を見つけると、そこへ跳びかかった。

「うえぇっ！？」

魔王が心底驚いた顔をして声を上げる。勇者が魔王の上に跳び乗ると、魔王は床へと落ちた。

「お、お前、なんでここにいるのじゃ！　早くどっかに行け！」

床にうつ伏せに倒れた魔王は、上に乗る勇者へと顔を向ける。するとそこには、勇者らしくない凶悪な顔をした勇者の顔があって。

「逃げるだなんて許さないぞ、魔王……」

「はぁ？」

「私は勇者だ。お前を倒すまでは、お前の命を奪うまでは、城に帰れないのだ！」

「はぁ！？　お前の役目はもう終わったぞ！　わしは倒れた！　わしは倒れたのじゃ！　お前の役目はわしの討伐、もう終わったのじゃぞ！？　だからこれ以上手出しなし！」

魔王が必死の形相で勇者へと怒鳴る。そしてのしかかるようにして乗る彼を落とそうとするも、勇者は微動だにしない。

「ほら、早くどかぬか！　お前が乱入したせいで、ワープ座標が狂ってしまうではないか！　ていうかお前ついてくんじゃない！　一緒に世界の狭間に行く気か？」

だが勇者は聞く耳を持たず、手に握った聖剣の刃を魔王の首に当てると、ぼそりと、

「首を落とせば死ぬのだろうか？」

「やめてぇえええ！！」

勇者の下で、魔王は暴れる。先程の威厳の欠片もなく、子供のようにもがき、足をばたつかせる。心なしか目は涙ぐんでいる。

「こらぁ、貴様！　わしを殺したらこの世界どうなると思っておるんだ！　わしが消えたらこの世界滅ぶぞ！」

「うるさいタレ目！　お前が消えたら一体何が起こるというのだ！」

勇者が怒鳴る。

そのとたん、世界が揺れた。何事かと勇者が顔を上げ、周囲の光を見回す。その次の瞬間、光が一瞬にして漆黒へと変わり、目の前が何も見えなくなり、激しい衝撃が勇者を襲った。まるで地面に打ち付けられたような感覚。しかしいまだに浮遊しているような、馬のように速い乗り物に乗っているような、はたまた船のように揺れるような感覚。ひどく気持ちの悪い感覚に激しい衝撃が襲いかかる。

そこで勇者の意識は途切れてしまった。

01：勇者、森に落ちる

耳元で鳴る轟音。身体を包むようにして下から上へと流れている空気の激流。上はオレンジ色で下は緑色。マントが激しくはためいている。

そこでようやく勇者は気がついた。

――私、頭から真っ逆さまに落ちていないか？

思った通りだった。下のオレンジ色は夕日の空、頭上にあるのは広い森。勇者は森を目指して、頭から落下していた。しかし、勇者は焦らなかった。

「なんのこれしき……」

いつの間にか、片手には聖剣が握られていた。勇者はその切っ先を頭上へと、地上へと向けて叫んだ。

「聖剣よ！　私に翼を！」

勇者が自身の落下に気付いてから叫ぶまで、約二秒。

勇者の叫びに答え、聖剣が輝く。すると聖剣の刃から巨大な一対の光の翼が現れ、大きく羽ばたく。すると落下していた勇者の身体は聖剣の羽ばたきとともにふわり浮く――はずだった。

聖剣は勇者の叫びに反応しなかった。翼を現すこともなければ、輝くこともなかった。

「ぬ？」

勇者が叫んでから聖剣の異常に気付くまで、約五秒。

そしてその三秒後、勇者は森の中へと落下し、結果、勇者は気がついてから十秒後、目覚めたばかりであるにも拘わらず、木々の枝に身体を打たれながら地面に叩きつけられたのだ。

『ついに聖剣にツン期が来たのかと思った』――のちに勇者は、このときのことを魔王にそう語った。

地上へと叩きつけられた勇者は、ゆっくりと身体を起こし、地面に座り込んだ。幸い、身体にはひっかき傷程度の怪我しかしなかった。もともと魔物との戦いで鍛えられた身体だ、高いところから落ちたものの、大事に至るようなことではなかった。だがそれでも勇者は人の身体である。落下した衝撃に、全身がひりひりと痛んだ。

「ぬぅん……」

あぐらをかき、腕を組み、勇者は不機嫌の表情を浮かべて首を回す。そのついでに周囲を見回せば、深い森が勇者を取り囲みどこまでも続いていて、上を見れば夕日に染まった空があった。

ここは一体どこだろう。そもそも、何故自分は空から落下していたのだろう。

頭の奥が痛い。何があったのか、よく思い出せない。魔王の城があるという森に向かう前に、近くの村で一休みをしたのは憶えている。そこから先の記憶は一切ない。

ではここは、魔王の城があるという森の中なのだろうか。道中魔物に襲われて、記憶が抜けてしまったのか？　しかしこの森は、あの森とは様子がまったく違う。別の森なのだろう、魔王の城があるという森は、茨でそこらじゅうを這っていて、村までも伸びてきていた。だがこの森には茨なんて全くない。それどころではない――魔物の気配さえしない。

「一体ここは……？」

勇者はぼやくように呟くと立ち上がる。そして森の中を進み始めた。じっとしていても、何も起きないしわからない。とりあえず西へ――夕日へ向かって進む。

旅の途中で来た森でもなさそうだった。このような森、見た記憶もないし、訪れた土地は全て魔物がすでに蔓延っていた。恐らく、初めて訪れる森だ。進みながら周囲を見回せば、動物の姿が見える。木の枝には小鳥が止まっていて、よく見ると巣もある。地面を見ればウサギの足跡のようなものもあり、草むらの中を見れば蛇もいる。いままで訪れてきた魔物の蔓延る森では見られない光景だ。魔物が森に住み着けば、ほとんどの動物は食べられるか、その前に逃げ出す。

「……ここはまだ、魔物の手が及んでいない、神聖な森なのだな」

久々に目にする森の動物達を見ながら、『ハートの国』にはまだこのような場所が残っているのだと思うと、勇者は静かに微笑んだ。

だがその笑みも一瞬だけで、すぐに凛々しい表情に戻ってしまう。魔物の手が及んでいない森があると知って安心した分――いずれはこの森も魔物だらけになってしまうと考えると、笑っていられなくなった。

聖剣に選ばれた自分が魔物の王――魔王を討伐しないと、この森もこの森以外の場所も魔物だらけになってしまう。そうして愛する自国『ハートの国』は魔物の国となってしまう。

自分は、それを阻止するために聖剣に選ばれたのだ。魔物の生まれる魔力を世界中に放つ魔王を倒すために。

自ずと聖剣の柄に手を触れる。

――一刻も早く、魔王を倒さなければ。

口を固く結ぶ。

――奴は妙な魔法を使ってくる……気をつけなければ。

――そういえばあの杖、茨が巻きつき赤い花が咲いた杖だったが、最初は禍々しいと思ったがよくよく考えたら随分ファンシーな杖だったな……。

魔王の杖を思い出す。古い杖に、暗緑色の茨。そこに咲いた赤い花ばかりが妙に目立っていた。ゴシックでどことなく可愛らしい杖。

と、そこで勇者は気付いて足を止めた。

「……なぜ私は魔王のことを知っているのだ？」

まだ魔王にあったことなんて、一回もないのに。これから魔王の城へ向かう予定なのに。

だが勇者の頭の中には、確かに魔王の姿があった。病弱そうでタレ目の男。振り下ろした剣を、杖で受け止められた。

――振り下ろした剣を杖で受け止められた？

それはつまり、魔王と戦った、ということなのだろうか。

だがまだ自分は魔王の城に着いていないし、そもそも魔王に一度も会ったことがないわけで。

曖昧な靄のような記憶がゆっくりとあふれ出してくる。だが、どれも曖昧すぎて確かな記憶なのか分からない。

もしかすると、夢のなかで魔王と戦った記憶なのかもしれない。そう考えると、そんな気がしてきた。そもそも魔王があんなファンシーな杖を持った病弱そうなタレ目の男であるはずがない。魔王はもっと、恐ろしいものだろう。

だが記憶は止まることなく溢れ出る。一体これは、なんなのだろう。自分の頭が、おかしくなってしまったのだろうか。

「……聖剣よ、私に真実を」

勇者は静かに剣を抜くと、その刀身を額に当てた。もしかすると、自分は何かの魔法にかかっているのかもしれない。それで頭がおかしくなったのかもしれない。そうであるならば、この聖剣が輝き魔

法を解いてくれるはずだ。しかし聖剣は輝かない。どうやら、頭は正常らしい。そういえば先程も聖剣が輝かなかった気がするが、頭は正常のようなのだ。気のせいだろう。

聖剣を鞘に戻し、勇者はまた進み始めた。何か分かったわけでもなかった。しかしじっとしていられない。先に進まなければ。

しばらく進むと、せせらぎが聞こえてきた。この先に、川があるらしい。そうわかると、自然と早足になる。川があるのなら、付近に川を利用する人が住んでいてもおかしくない。

目の前に、ゆっくりと流れる小川が姿を現す。幅も小さく底も浅い清流だった。ひとまず勇者は川の畔に膝をつくと、その流れに両手を差し入れ、きれいな水を両手いっぱいにすくった。それをおもむろに自身の顔にかけ、顔を洗う。顔を洗えば気分が晴れるだろう。

だがそう簡単に気分は晴れなかった。胸の中にもやもやがたまっているし、頭の中ももやもやする上に奥が痛む。

水面をみれば、自分の顔が映っている。いつもと変わらない顔だった。

と、川上から、草むらを踏み分ける音が来っこえてくる。勇者はすぐに顔を上げると、聖剣の柄へと手を伸ばした。足音はゆっくりだが徐々にこちらへと近づいてくる。魔物かもしれないと、勇者は足音のする方を睨んだ。

しかし、森の奥から姿を現したのは、人の良さそうな笑みを浮かべた、白髪の老人だった。杖をつきながら、ゆっくりとこちらへやってくる。

「おや、この森に人がいるとは、珍しいのぉ。どうされたのじゃ？」

老人は勇者に気付くと、笑顔でそう問う。しかし勇者は聖剣の柄から手を放そうとしない。もしかすると、魔物が老人に化けているのかもしれない。しかし、そうであるならば聖剣が危機を察知して輝くはずだ。聖剣の様子を見れば、輝く様子なんて全くない。この老人は魔物でないと、教えてくれている。

「こんばんは、老人よ。ちょうどよかった、ここは一体どこなのだ？　いつの間にかこの森に迷い込んでしまったのだが」

勇者は聖剣の柄から手を放し立ち上がると、老人に笑い返した。すると老人は答えた。

「ここは『迷いの森』じゃよ、お若いの」

――『迷いの森』？

初めて聞く名の森だった。勇者は首を傾げた。

「初めて聞く名前だ」

「初めて聞くじゃと？」

すると老人は、一瞬驚いたかと思うところころと笑い出した。勇者は何故老人が笑っているのか分からず、また首を傾げる。老人は、すまん、と謝ると勇者に言った。

「お若いの、お前さんは田舎から来たんじゃな？　だからこの国の大半を占める『迷いの森』を知らないのじゃな。うむ、仕方のない

ことじゃ」

だが勇者は、老人の言葉の意味が分からなかった。

「いや……私は王都から来たのだが……それに、国の大半を占める森の存在なんて知らないぞ」

「なぬ？　お若いの、王都から来たのか。そういえば騎士様のような姿をしているの」

勇者は頷いた。確かに自分は王都から来たのだ。その王都で聖剣に選ばれ、国王に魔王討伐の命を受けた。

「私は勇者だ、老人よ。これから世の平和のため、魔王を倒しに行くのだ」

勇者は腰に両手をあて、名乗る。しかし老人はいまいち分からない様子で首を傾げた。

「勇者？」

「そうだ。私は聖剣に選ばれし者だ」

老人は自分の事、聖剣の事、魔王の事を知らないのだろうか。勇者はふと思った。自分のことは、もう国中に知られているはずだった。しかし、この老人はここまで言っても分からない様子でいる。

「……お若いのは、勇者なのか？」

しばらくして、老人は子供のように尋ねてきた。勇者はそうだ、と肯定する。

「聖剣に選ばれし、魔王を倒す者――それが私だ」
老人はそれを聞くと、黙り込んでしまった。一体どうしたというのだろうか。
だがしばらくして、
「……迷いの森は気を狂わせるからの」
「？」
不意に老人は顔を上げた。そして、
「お若いの、お主、どこからやってきたのじゃ？」
「どこからと言われても……」
勇者は自分が何故この森にいるのか、考える。
「どこからと言われても……気付いたら私は空から落ちてきていて、そしてこの森にいたのだ」
すると老人は難しい顔をした。
「お若いの……もしや、頭を打ったりしなかったかの？」
「した……かもしれない。空から落ちたときに」
老人はそれを聞いてうんうんと頷くと、勇者の背をぽん、と叩いた。
「もうじき夜じゃし、わしの家で休むが良い。一眠りすれば、現実に戻れるはずじゃぞ。なぁに、わしの家はすぐそこじゃ」

老人は勇者の背を力強く押す。勇者は困りながらも老人に従い、前に進む。

「と、泊めてくれるのはありがたいが、『現実に戻れる』とは、どういうことだ？」

「そのままの意味じゃ」

深く溜息をつき、しかし笑顔を浮かべて老人は勇者の顔を覗き込む。

「お若いの、夢を見すぎじゃ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2952y/

勇者と魔王のメタ発言

2011年11月19日10時16分発行